

教室でできる特別支援教育

「わたしの「引き出し」に
「ついでにいふもの」

「講演」誌上再現
まとめ

まえがき

前号までに2回にわたり、テーマ「教室でできる特別支援教育」に関する「講演」の誌上再現を行いました。本テーマのまとめとなる今号では、誌上再現で紹介した中でも、特にわたしが大切に考えているものを絞り込み、あらためてお伝えしようと思います。通常学級における特別支援教育を進める際に、これらのことを意識しておく実践のぶれがな

くなり、自信をもって子ども前に立てるのではないかと思います。これまでの実践や研究の中で確認したり、新たに気づいたりした知見を、できるだけ具体的なエピソードとともにお伝えします。みなさんがすでにおもいの「引き出し」の中身とすり合わせ、「引き出し」の整理に役立てていただければ、うれしく思います。



名城大学大学院 大学・学校づくり研究科 准教授
曾山 和彦

そやま かずひこ*1961年群馬県生まれ。東京学芸大学卒、秋田大学大学院修士課程修了、中部学院大学大学院博士課程修了。東京都、秋田県の養護学校教諭、秋田県教育委員会指導主事、管理主事を経て現職。社会福祉士、学校心理士。上級教育カウンセラー。編著書に「学習に苦戦する子」(図書文化社)、「気になる子への対応術」(教育開発研究所)、「特別支援教育に生かせるカウンセリング」(ぎょうせい)、著書に「時々「オニの心」が出る子どもにアプローチ 学校がするソーシャルスキルトレーニング」(明治図書)ほか多数。

Ⅰ 障害理解によるユニバーサルな働きかけ

わたしたち教師は、教育に関するプロフェッショナルです。プロと

しての腕は、経験年数や日々の研鑽の度合いによりさまざまですが、ひとたび子ども前に立てば、すべての教師が「子どもを教え、はぐくむ」ことができているかどうかを問われるのは当然のことです。専門教科の指導、「自己指導能力」の育成を目指す生徒指導に関する「腕」を磨くことに異論をささむ教師はおそらくいないでしょう。しかし、特別支援教育に関する「腕」を磨くことに積極的になれないという声は、残念ながら、いまもわたしの耳に届

くことがあります。

例えば、想像力・見通しの弱さが障害特性のひとつであるPDD(広汎性発達障害)その中核は自閉症)の子どもが、ある物事にこだわりをみせるのは当然のこと

す。その際に、「いつまでもこだわってダメでしょ」としかるだけでは、その子に対する教育は十分とはいえません。彼らの認知特性でもある視覚情報(写真・絵等)を活用しながら見通しがも

ちやすいような働きかけをすることが不可欠となります。

「小中学校の通常学級に在籍する発達障害のある児童生徒は6.3%」^{※1}という数値が示されている現代の学校現場においては、LD(学習障害)・ADHD(注意欠陥/多動性障害)・PDD等の発達障害について、杉山登志郎氏の指摘のように「知らないでどうして教壇に立つことが許されるであろう」ということになるでしょう。^{※2}

な働きかけといえます。発達障害がある子への働きかけの基本について、おさらいしてみましょう。

Ⅱ 二つのアンテナを立てる

教室の中で言動が気になる子を前にすると、わたしたち教師の「悪いことを検知するアンテナ」は即座に反応します。若いころのわたしも、「このアンテナの精度だけはかなり高かった」といえます。子どもの言動がアンテナに反応した瞬間、「ダメでしょ、やめなさい」という注意・叱責の言葉をかけることが多かったと思います。しかし、いくら子どもをよい方向に導こうとしても、注意・叱責だけでは子どもは育ちません。子どもが育つには、「よいことを検知するアンテナ」の精度を高め、子どもの言動を「偉いね、すごいね」と褒めたり、「ありがとう、うれいなあ」と勇気づけたり、「〇〇したんだね」と認めたりする言葉かけが必要です。



【参考文献】※1 文部科学省「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」 2002年
※2 杉山登志郎「アスペルガー症候群と高機能自閉症 青年期の社会性のために」学習研究社 2005年発行

学校現場をまわっていると、この二つのアンテナがしっかりと立っている先生に出会うことがあります。気になる子が笑顔で過ごすことができている教室は、わたしが若いころもち得なかった「よいこと」を検知するアンテナが、教師にもまわりの子にもしっかりと立っているのだと思います。

Ⅲ まわりの子を育てる

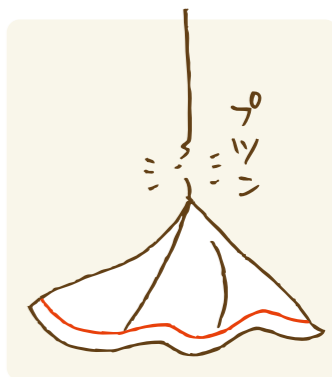
わたしは以前、秋田県教育委員会に勤務していたとき、ある小学校中学年の学級に在籍する気になる男児の事例(暴言、離席等)にかかわったことがあります。学校からの巡回相談の依頼を受け、複数回、学校を訪問する中で、担任や管理職とさまざまな「作戦」を立て、男児の指導支援を行いました。1年間の巡回相談を終え、その総括として、男児の成長を振り返る会で、担任が

しみじみと語ったのは、「まわりの子を育てたら男児の状態も改善されました」という言葉でした。気になる子自身の言動の稚拙さはあるものの、まわりの子のかかり方も、時として男児の気になる言動の「呼び水」になることが多かったということ。そこで、まわりの子のかかり方にも目を向け、男児へのかかり方を教えたり、適切なかかり方ができていることを褒めたりしているうちに、男児の状態、学級の雰囲気もよい方向に変化したということでした。

この事例からわたしが学んだ「まわりの子を育てる」ということとはほぼ同じ考え方に、後日、ある著作の中で出合いました。

それが、親野智可等氏の「ハンカチはどこをもち上げてでも全体が上がる」という話です。^(※3)

「このわたしのハンカチを見てください。(中略)このほつれた一本の糸をもつてこのハンカチをもち上げてみます。あつ、糸が切れてしまいました。(中略)こんなところをもつても、ハンカチ全体をもち



上げることなどできませんね」という言葉です。

若いころのわたしは、気になる子(※)の言動に目を奪われ、その子への働きかけが多くなる分、まわりの子への働きかけが減り、結果的に学級(ハンカチ)の雰囲気が悪くなってしまうという苦い経験が多くありました。

さて、みなさんの目は、気になる子だけでなくまわりの子へも向いているでしょうか？

Ⅳ 肯定的な表現を使う

子どもの気になる言動を正したいという思いは、教師であれば

だれもが強くもっていることでしよう。それゆえに、子どもにかける言葉が、「○○はいけないよ」「○○はダメだよ」「○○をやめなさい」等、語尾が否定的であったり、禁止の表現になったりしがちです。

気になる子の中でも、特にPDの子は、否定的な表現をストレートに受け止めてパニックに陥るケースがあります。

また、「悪い言葉を使うのはダメだよ」等の禁止の言葉を繰り返して伝えていくと、記憶特性として、前半部の「悪い言葉を使う」が残ってしまうこともあります。それらを防ぐには、できるだけ否定・禁止の表現とならないよう、肯定的な表現を使いたいものです。

先の例であれば、「優しい言葉を使おうね」等の表現であれば、PDDの子にとっても心地よく受け止めやすいことでしょう。

さて、みなさんの日ごろの言葉かけは、肯定的、否定的な表現のどちらが多いでしょうか？

V 最高・最強の教材は教師自身

これまでの教員生活で忘れられない思い出は数多くありますが、ある母親の連絡帳に「今日も家で、子どもが先生の真似をそっくりにやっています」と書かれたときの「ドキッ」とした思いは、いまでも鮮明に思い出されることのひとつです。

そのときの「わたしの真似」というのは、学級のある子どもを注意しているときのわたしの口真似でした。「よくそこまで観察!しているなあ」と感心してしまっただけです。

教師であれ、親であれ、子どもの前に立つ大人は、「最高・最強の教材」としての大きな責任があります。残念ながら、若いころのわたしは子どもにとってマイナス



みなさんは、立ち居振る舞いの「教材」として、どのように子どもの目に映っていることでしょうか? わたし自身もあらためて、いまの自分をチェックしてみようと思います。

Ⅵ すべての子どもがグロープをもっている

「教室の中で気になる子には、褒める・しかる等、教師からの目や手、言葉がたっぷりとかけられている……」。若いころのわたし自身の実践がそうでしたし、いま、学校現場でも多く見かける光景です。子どもにとって、褒められた

り、しかられたりすることは、「ボクを認めて、ワタシを見て」という承認や注目欲求が満たされることになりました。例えるならば、気になる子は、教師とのキャッチボールが多い子ども、グロープで「ボール」を受け取る機会が多い子ども、といえます。

教室のすべての子どもが教師からの目や手、言葉がかかるのを待っています。すべての子どもがグロープをもっています。中には、グロープを高く掲げることができず、机の下の方でもっている子どももいることでしょう。そうした子どもたちに、教師からの「ボール」が投げられないとしたら、やがてその子らは、グロープをはずしてしまいかも知れません。学校にもついても仕方ないので、ときには家に置いてきてしまう子どもも出てくるかもしれません。さらに、グロープを置いてくるだけにとどまらず、「自分自身の身体を家に置いてしまう」(不登校)状態が生じる懸念もあります。

わたしたち教師は、1日の学校生活の中で、どれくらい、子ども

待望の // **2** 冊同時刊行されます!

あなたの授業を 応援する hito*yume book 2012年 3月刊

筑波大学附属小学校教諭 **白石範孝** の
3段階で読む新しい国語授業

教材が
わかる!
授業が
できる!

2 実践編 **物語の授業**



昨年、大反響を呼んだ「3段階で読む」。その実践編の刊行がついにスタート! 今年「物語の授業」。3段階の授業の「作り方」がさらに明らかに。

合計320分の
白石授業を完全収録

B5判 128ページ
定価2,100円(税込)

「3段階」の入門にはこちら!

新登場の教科書教材の分析も満載です。
B5判 144ページ 定価2,100円(税込)



筑波大学附属小学校教諭 **夏坂哲志** の

板書で輝く算数授業

～教師の表現力を育てよう!～



板書が
わかる!
授業が
かわる!

B5変型判
120ページ
定価1,680円(税込)

子どもの視覚に訴える板書、思考を促す板書のワザを一挙公開。

板書のいろはをレクチャーする入門編(一部カラー)。

実践編には合計280分の夏坂授業を完全収録。

田中博史先生と白石範孝先生による明快爽快&辛口解説、
正木孝昌先生の特別寄稿も入った、

まるごと一冊板書の本!

書名、表紙デザインは変更することがあります。



「夜回り先生」として有名な水谷修先生が講演の中で、「子どもたちに1日10回言葉をかけてほしい。大人から言葉がかかるのは愛されているということ。子どもは大人から愛されれば愛されるほど非行から遠ざかる」という趣旨のことを話されました。この言葉は、いま、わたしの「引き出し」に大切にしまっています。みなさんは、子どもたちのもつ

グロープにどれくらい「ボール」を投げていますか? お互いの実践を振り返って、チェックしてみよう。

Ⅶ 教育の「技」が必要

わたしはこれまでの自分自身の実践、全国各地で出会う実践を振り返り、現代に生きる子どもたちの課題として、「かわり力」の育成が大きなウェイトを占めるのではないかと感じています。中でも、ソーシャルスキル(人づきあいのコツ、技術)、自尊感情の二つが、「かわり力」に大きな影響を及ぼしていると感じています。それ故、「学校・学級生活の中で、いかにして子どもたちのソーシャルスキルや自尊感情をほぐくむか」ということが、現在、わたしの実践・研究上の最上位課題になっています。

級全体に対してソーシャルスキルトレーニングを実施し、成果を報告している実践があります。また、気になる子に対する抽出指導の中で、トークンエコノミー法(※4)や応用行動分析を活用している実践もあります。先行する実践・研究の中には、子どもをほぐくむための「技」がさまざまに使われています。そうした「技」の中から、自分にとって使い勝手のよいものをチョイスし、目の前の子どもに合わせてアレンジを加えながら、新たな実践・研究に取り組んでみてはいかがでしょうか。

構成的グループエンカウンターの実践者である鹿嶋真弓先生が、テレビ出演の際に、「教育の情熱だけでは難しいことがある。子どもをほぐくむためには技も必要」という趣旨のことを話されたことがあります(※5)。この言葉もまた、いま、わたしの「引き出し」に大切にしまっています。

みなさんは、いくつの「技」をおもちでしょうか? お互いに、少しずつ「技」を増やし、磨いていきましょう。

あとがき

これまで3回の連載の中で、わたしの「引き出し」にあるものをいくつか開いてみました。これからも新しいものが「引き出し」に入るよう、実践・研究を重ねていきたいと思えます。みなさんのまわりにお薦めの実践・研究がありましたら、是非、ご一報ください。わたしのHP「学校におけるカウンセリングを考える会」から、メールの利用が可能です。みなさんからの声を楽しみにしています。



2011年
9月30日
発行

チャートでわかる
カウンセリング・テクニックで高める「教師力」(第3巻)
特別支援教育に生かせるカウンセリング
諸富祥彦(編集代表) 曾山和彦・岸田優代(編集)
【ぎょうせい】定価2,100円

【用語解説】※4 トークンエコノミー法：行動療法の強化手法。「目標とする行動」がうまくできるとき、シールなどのトークン(代用貨幣)を与え、貯まったとき、「欲しがっていること」と交換する手法。
【参考文献】※5 「プロフェッショナル 仕事の流儀 中学教師 鹿嶋真弓の仕事 人は人の中で育つ」NHKエンタープライズ DVD 2007年発売

国語

白石範孝の
おいしい国語授業レシピ
シリーズ

算数

田中博史の
おいしい算数授業レシピ
シリーズ

二瓶弘行の
「一日講座」シリーズ

社会

気軽に読めて
しっかり役立つ!

hito*yume book
既刊も好評発売中

各刊B5変型判 128ページ
定価1,680円(税込)